

夜の遠足

べつとりと くされ落ちる
いやにうすあかい深夜の街
いくつか消え残つた街灯が
黄色い体液をためてふくらむ膀胱のように
とざされた闇の奥を照らす

人のいない夜の街路を
いまよこぎつて過ぎるのは 小さな遠足の行列
あるいは悪い意識の影?
建物のかげに やがて先頭がかくれ
後尾がかくれ 別の建物のむこうに
先頭が現われ 通りから通りへ
どこまでも

叫びもなく歩む黒い影

安全地帯の広告灯が
毒をうけるリンパ腺のように
赤ぼつたくふくらみながら無限に闇と並列する
何かの血を吸うもののように
線路はにぶくおのれをよじり
かなたの夜の内壁にくつついて動かない

小さな行列は なおも街かどを過ぎる
いちず歩む影の一団よ
だれひとりとしてはじき出ることのできない
こののろわれた連鎖よ
もうだれも問い合わせてしまい
なぜそんなにも身なりをととのえ肅々と
なぜ高みを求めて歩むのかと
やがておのれと共にくずれ落ちる高みを求めて

深夜の街をさまようのかと
黒々と並び立つ建物の横には
洗濯女のしまい忘れた赤い月
いつもの

呪術

子供たちのまだ眠つて いる
明け方の街の空に
どこからか一本のマイクが垂れる

犠牲者の血で化粧した呪術師が
ビルの中で太鼓をたたく
やさしく またはげしく
きょうの儀式が始まつた
さあ みんな祈れ
マイクにむかつて手を合わせ

銀のマイクは中空に垂れて

悪意のように 動かない

どんな小さな願いも 叫びも
毒の中に送り込む精巧なマイク

呪術師の太鼓がなおもはげしく
寝覚めの街にしびれ伝わる

水蒸気の中で マイクは光る

あの黒いひものはてに

いつたい何が連なるのか

真空管で組み立てられた增幅回路に
どんな未来が脈うつのか

やがて朝の儀式は終わる
ひとりの気の狂った友人が

街の雑踏の中へ だまつて出ていく
マイクに捧げる花束を抱いて

雨

わたしの踏切に 雨が降る

遮断機がおりて いつも

赤い列車が通る

遠くから 大勢の

手のない子供たちを運んでくる

わたしの街で

大きな紫陽花が腐る

青ざめた肺胞のように

口を割られたアンプルのからが

踏み場もなく きらきら光る

街にあふれる

手のない子供たちよ

つながることも 抱き合うこともない

個体の群れよ

なおも繁殖し 増殖し

建物のあいだに満ち満ちる破壊者よ

わたしの踏切に雨が降る 音もなく

赤い列車が通る

立ちどまつた無数の心臓が

遮断機の前で凝結する

ネオンはるみ

街は陣痛のためにかすかに歌う

ある残業

人のいない夜の職員室が

廃墟のように明るい

わたしはひとり残業する

部屋のすみずみから

きょうも

投げ捨てたからつぽの言葉を掃き集める

積みあげた本のかげに

爬虫類のようにうずくまつて

子供たちの腹わたを始末する

蛍光灯の光が

蜘蛛の巣のようになり落ちる廊下
疲れた教室が眠つてゐる

わたしはコンクリートの壁に

のびあがつて

白い呪文を剥ぎとる

大きな箱を荷造りする

かなたの闇にむかつて一列に

わたしのかずかずのぬけがらを荷造りする

夜ふけの校舎の内部に
ひとりの少年が灯をともす

「汽車に乗りおくれたのです」

見知らぬ少年と水道の水を汲む

三階のはてまでどくどくのぼつてくる

燐のような水よ

洗えば洗うだけよごれるわたしの手
洗えば洗うだけ小さくなる少年の手

あすのために

ふたりで花瓶をうち碎く

見知らぬ少年と向き合つてすわる
図鑑を開く

教室の窓に立つ

ネオンの消えたあの森のあたりを
骨格から離れたばかりの大きな月が
いま赤く燃えながら

こちらにむかつて

漂つてくる